

日韓友人同士会話におけるポライトネス・ストラテジー —オーバーラップ発話に注目して—

林 河運

1. はじめに

日常コミュニケーションを観察してみると、「オーバーラップ」現象が頻繁に観察されるが、必ずしも円滑なコミュニケーションの妨げにはならない場合が多いと考えられる。吉田（1989）は、「むしろコミュニケーションを促進しているように思えるものさえある」と指摘している。その例として、挨拶の「オーバーラップ」や相手の発話とあいづちの「オーバーラップ」、相手の意図を察して割り込んだことによる「オーバーラップ」などが挙げられる。挨拶は聞き手の側からすると、相手の発話が終わってから自分の挨拶の発話をしなければならぬということではなく、オーバーラップ発話でもまったく構わないのである。ところが、「オーバーラップ」現象は日韓両言語のコミュニケーション場面において頻繁に出現する話しことばの特徴であるにもかかわらず、これに関連する日韓対照研究についてはまだまだ少ない。そこで本研究では、「親しい友人同士の会話」ではどのように実現されているのかをポライトネスの観点から分析していきたい。

2. 先行研究

西洋語を中心とした社会言語学と語用論の分野では、移行適切場（turn-relevance place）の妥当性をはじめ、発話の重複（overlaps）や発話の割り込み（interruption）などの要素の性格と機能、発生頻度、話者の性（sex）や言語状況などといった社会的な要因間の関係に関する研究が数多く成されてきた。それらには、オーバーラップ発話だけに焦点を当てた研究は少なく、話者交替の観点から付随的に行われる現象として扱った研究が主流である。オーバーラップ発話を研究の焦点とした研究には、吉田（1989）、藤井（1996）、生駒（1996）、姜（2000）、都（2001、2002、2003、2004）などがある。

吉田（1989）は、日本語の会話の中で呼びかけ、名乗り、はじめの挨拶、終わりの挨拶、切り上げのことば、話題の発展・展開時、句末近くおよび句切れのないところにあいづちが入る時、応答の一部の後、相手が問いかけた質問・疑問などを先取りして応答する時、相手が言いかけた意見や説明内容を先取りして応答する時、話順を取るための割り込みの時などをオーバーラップ発話の起こりやすい位置としている。また、オーバーラップ発話を起こす要因としては、会話参加者の親疎関係、心理状態、会話の運び方の癖、話題に対する関心度、談話展開の難易度などを挙げている。

藤井（1997）は、オーバーラップ発話が発話権の維持を脅かすものであるという Sacks らの見解に対して、日本語の場合は先行発話への同意、共感、関心などを積極的に示し会話を促進させ、話者同士の連帯感を強める協力的な性格を持つとしている。藤井の研究は、コミュニケーションに与えるオーバーラップ発話の影響を考慮に入れ、オーバーラップ発

話の機能を明らかにしようとしたものである。

生駒（1996）は、オーバーラップ発話の起こる位置、性質の観点から分類した後、オーバーラップ発話の機能を会話の進行と人間関係の確立という二つの観点から探求した。オーバーラップ発話が会話参加者に与える心理的な影響についてレポート¹を取り上げ、オーバーラップが発話の接触、すなわち会話時のスキンシップのように柔らかな雰囲気の中で好感が示され、遠慮のなさの現われとなり、会話参加者に友好的な感情を呼び起こすものであると述べている。生駒の研究も藤井の研と同様、人間関係をベースにしてコミュニケーションとオーバーラップとの関係を中心にした研究である。

姜（2000）は、韓国語と日本語の会話におけるオーバーラップ発話の特徴を述べている。日本語の会話と韓国語の会話におけるオーバーラップ発話の頻度をそれぞれ比較し、日本語話者は参加者同士の人間関係を大切にし、会話に積極的に参加し、二人が協力し合って発話を共同で作り上げようとする共和的姿勢で会話を進めているという。一方、韓国語話者は日本語話者と同様に共和的側面はあるものの、自分の主張を相手にはっきり示し、一人で発話を成立しようとするなど、話し手と聞き手の立場の違いを明確にしようとする対話的姿勢で会話を進めていくと述べている。

都（2001、2002、2003、2004）は、発話文を重層的な判断基準によって類型化した上でオーバーラップ発話を機能面において分類し、日韓両言語におけるオーバーラップ発話のコミュニケーションへの影響について考察している。都によると、日本語のオーバーラップ発話は、会話に、友好的かつ協力的に働く傾向があり、韓国語のオーバーラップ発話は、積極的かつ主導的に働く傾向があると述べている。

一方、韓国語のオーバーラップ発話の研究は、筆者が知る限りは皆無に等しく、談話研究の一環として 김순자（1999、2000）、임규홍（2001）などが話者交替や話順取り、あいづち、発話の割り込みなどを中心に考察している。

김순자（1999、2000）は、話者交替に現れる男女話者の特性を分析し、女性話者の話順取りは先行発話に対する確認質問や先行発話に同意や共感を表明するための肯定的なもので、男性話者の場合は先行発話に対する反対、否定の内容を遂行するための話順取りであるとしている。

임규홍（2001）は、発話の割り込みを方法、機能という上位の範疇からディスコース・マーカートの有無、オーバーラップ発話の有無、受け入れの態度、会話進行の状態、情報の理解という面において多岐に渡る下位範疇に分類し、その機能を分析した。

これまでのオーバーラップ発話をめぐる研究は、機能面でのオーバーラップ発話の分類を中心となった研究、場面や対人関係との関わりを中心にした研究、発話権利との関わりから付随的に生じる現象として扱った研究が主流であると言える。各研究において、オー

¹ 佐々木（1994）によると、レポートとは人間同士の間に生じる「波長が合う」「共感が持てる」「信頼感が持てる」「暖かさを感じ合う」といった感情であるとしている。佐々木は会話の中でレポートを表示し、その発声・維持・補強に影響する要素として「個人的体験への言及」「笑い声」「発話の重なり」を挙げている。

オーバーラップ発話の機能の判断基準とされているオーバーラップ発話間のトピックの一致可否や発話権の維持などは、会話への影響を考察するための重要な手がかりであることは間違いないが、分析者の主観的判断に頼りがちなものであるため、より客観的に判断できる根拠の提示が必要であろうと考える。

そこで、本研究ではまず、オーバーラップ発話のメカニズムを明らかにするために、分析者の主観によるものではなく、発話参加者によって生み出された発話形式を手がかりにし、談話レベルでつまり談話の流れの中でのオーバーラップ発話を、ポライトネスの観点から分析していきたい。

3. オーバーラップ発話の判断条件

本節では、都（2003、2004）の分類を援用し、オーバーラップの種類の見別条件について述べよう。見別方法は四段階に分かれており、第一段階、オーバーラップ発話の形式からあいづち発話と実質発話の組み合わせを区別すること、第二段階、オーバーラップ発話による発話の中止があるかどうかを見極めること、第三段階、中止後の修復や続きの有無を見分けること、第四段階、オーバーラップ発話前後の話題の類縁性を考えること、このような重層的なプロセスによってオーバーラップ発話を体系的に分類することができる。オーバーラップ発話をめぐる見別条件を一言で言うと、重ねられ手に対して積極的に働くか、重ねられ手の話の調子に合わせて好意的に働くか、すなわち、重ね手の自己発話の優先的なオーバーラップ発話であるか、重ねられ手発話の配慮的なオーバーラップ発話であるかで大別される。換言すると、会話を自ら主導的に導くためのオーバーラップ発話であるか、相手に調和して協力的に導くためのオーバーラップ発話であるかに関わる。詳細は、<表1>に会話へのオーバーラップ発話の影響を分かりやすくするために、会話の主導性、協力を軸にそのポライトネスへの度合いを分類する。

<表1>オーバーラップ発話の影響

第一段階 どのような発話形式が重なるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・実質発話と実質発話のオーバーラップ発話系 ・「実質発話が重なる混合系」² 「あいづちが重なる混合系」³ の混合発話のオーバーラップ発話系 ・あいづちとあいづちのオーバーラップ発話系 	<p>重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的</p>

² 「あいづちと実質発話」、「あいづち+あいづちと実質発話」、「実質発話+あいづちと実質発話」の3種類を「実質発話が重なる混合系」と呼ぶことにする。

³ 「実質発話とあいづち」、「実質発話+あいづちとあいづち」、「実質発話+あいづちとあいづちと実質発話」の3種類を「あいづち重なる混合系」と呼ぶことにする。

第二段階 重なった後、発話の中止があるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 重ねられ手中止 ・ 両方中止あるいは中止なし ・ 重ね手中止 	<p>重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的</p>
第三段階 中止発話の修復または継続があるか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己修復（重ねられ手修復）あるいは重ね手継続 ・ 修復なし ・ 相手修復（重ね手修復）あるいは重ねられ手継続 	<p>重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的</p>
第四段階 オーバーラップ発話前後、話題の関係はどうか	ポライトネスへの働き方の度合い
<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題転換 ・ 話題拡大 ・ 話題維持 	<p>重ね手の pos・face に対して積極的 重ね手が主導的</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>重ねられ手の neg・face に対して積極的 重ねられ手に対して友好的・協力的</p>

注：都（2004：208）にあるものを筆者が少し修正加筆したものである。

4. 分析方法

4.1 会話資料

友人同士会話の収集は、2005年3月から2007年3月にかけて収集した。なお、友人同士のインフォーマントは、日本人20名（男性10名、女性10名）及び韓国人14名（男性9名、女性5名）に依頼して行った。採集した言語は日本語と韓国語であり、日本語母語話者のデータは日本語で、韓国語母語話者のデータは韓国語で収集した。なお、インフォーマントの年齢は20才～28才と限定しているし、会話資料を収集した時点では、JFA（26才：会社員）とJFB（26才：会社員）を除いた、全員20代の大学・大学院生である。

インフォーマントの詳細については付録の〈表2〉に示す。

＜表 2＞友人同士の会話資料の組み合わせ

	場 面	ベース	対話相手	会話数
会話 31	日本人同士	JFA(26 才)	JFB(26 才)	10 会話
会話 32		JFC(22 才)	JFD(22 才)	
会話 33		JFE(21 才)	JFF(21 才)	
会話 34		JFG(20 才)	JFH(20 才)	
会話 35		JFI(20 才)	JFJ(20 才)	
会話 36		JMA(20 才)	JMB(20 才)	
会話 37		JMC(20 才)	JMD(20 才)	
会話 38		JME(20 才)	JMF(20 才)	
会話 39		JMG(20 才)	JMH(20 才)	
会話 40		JMI(20 才)	JMJ(20 才)	
会話 41	韓国人同士	KFA(27 才)	KFB(27 才)	10 会話
会話 42		KMA(24 才)	KMB(24 才)	
会話 43		KMC(23 才)	KMD(23 才)	
会話 44		KFC(22 才)	KME(22 才)	
会話 45		KMF(21 才)	KFD(21 才)	
会話 46		KFE(20 才)	KMG(20 才)	
会話 47		KFE(20 才)	KMH(20 才)	
会話 48		KFE(20 才)	KMI(20 才)	
会話 49		KMH(20 才)	KMI(20 才)	
会話 50		KMH(20 才)	KMG(20 才)	

注：話者記号は3文字で表す。初めの記号は国籍で、Jは日本を、Kは韓国を表す。次の記号は性別で、Fは女性を、Mは男性を表す。最後のアルファベットは通し番号を示す。なお、■はベースのインフォーマントのうち、複数調査したことを示す。

4.2 文字化の方法

上記の方法で収集された会話資料の文字化及び分析の処理は、宇佐美（2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」に基づいておこなったが、一部独自の記号を筆者が付け加えた。会話の文字化は、日本語と韓国語ともに2次チェック⁴までおこなった。主な記号は以下のとおりである。詳しくは宇佐美(2003:4)を参照されたい。

⁴ 文字化資料のチェックはもう二人の大学院生（日本人・韓国人各一名）と一緒にいった。なお、日本語は日本語母語話者に、韓国語は韓国語母語話者にチェックしてもらった。

<記号凡例>

BTSJ で用いられる記号を以下にまとめる。はじめに、BTSJ に基づいて文字化する際の基本的な記号を挙げる。しかし、BTSJ はその名の通り、「基本的な文字化の原則」であり、特定の研究の目的に応じて、例えば、より詳細な音声情報を付加するなど、BTSJ を基本にしつつも、特定の目的に適した独自の記号を設けることを奨励するものである。

,, 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。

例えば、J1：ハハあのライブ・おととい行って
J2：きち ちゃいました、県民会館に、
えっ。

J2：あそうなんですか。

J1：来てくれて。

? ? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。

例えば、K：で、私は日本語の断り表現。

J：断り??。

K：表現,,

J：あ—。

↑ → ↓ イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、↑, →, ↓ を用いる。

例えば、J2：あ—どうす・どうしようどうしようね↑。=

J1：めぐちゃんおめかしするって言うんだもんだって。

→ 質問と自己開示による話題導入や友人同士の話題導入の発話文に → つける。なお、その話題導入の発話文すべてを太文字に表す。

例えば、→ J1：何年生ですか？。

J2：今4年生です。

J1：あ4年生

→ J2：何年生ですか？。

J1：今2年生です。

・ ・ ・ 文中、文末に関係なく、音声的に言い淀んだように聞こえるものにつける。

例えば、J：けいざい・ ・ かな経済、経営があるんですか？。

“ ” 発話中に、話者以外の人の発話が直接引用された場合、その引用された部分を “ ” で括る。

例えば、J1：こ・あー↑と思ってーへー<嬉しそうに>。

J2：えへー。

J1：###系なんですよーっていったら、

J2：うん。

J1：なんか“がんばってねー”<男っぽい声で>。

J2：へえー。

【 】 第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合は、「【 】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、【 をつけ、第2話者の発話文の冒頭には 】をつける。

例えば、J2：あSO<地名>??。=

J1：=はい、ど・【。

J2：】やっ た、YN<地名>です。

聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。

例えば、J1：ハハハハ #####大学に来てて、h へへへへへ。
J2：ハハ。
J2：えへ↑。

J2：そうなんですか。

= = 改行される発話と発話の間(ま)が、ほとんどか全くないことを示す。

例えば、J1：ははじめましてハハハハ。

J2：はじめましてハハハ、あ。=

J1：=自己紹介。

[複数行に跨る括弧は会話参加者たちの発話が重なっていることを示す。(筆者独自の記号である)

例えば、J2：なんか、アルバイトって面接とかすごい緊張しないで すか？。

J1：あー。

波線 発話者が笑いながら話していることを示す。(筆者独自の記号である)

例えば、J1：HS<人名>も飲んだー。

J2：なんかおめかしそう。

J1：もっとおめかしするよ。

傍線 通常より小さな声で話していることを示す。(筆者独自の記号である)
例えば、J：日本に来てどれくらいですか？。
K：えと、修士からだったので、にさん4年目ですね。
J：あー、日本語お上手ですね。

傍線 通常より大きな声で話していることを示す。(筆者独自の記号である)
例えば、J1：わ・あ↑スパイダマン(あ↑)3とか。
J2：あー見ましたか？面白かったですか？。
J1：ながーいですよ。

h h 呼気音は、hh で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
(筆者独自の記号である)
例えば、J2：あれだよー。
J1：h h。
J2：ワールドカップかー、ドイツ行くか。

. h h 吸気音は、.hh で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
(筆者独自の記号である)
例えば、J1：ま今のところ黙ってた { ハハハハ、h。
J2： { ハハハハ、h。
J2：だよー、うんー。

ABC 会話の途中に出てくる「ABC」のようなアルファベットは人名や知名など、被験者のプライバシーの保護のために、イニシャルとして示す。
(筆者独自の記号である)
例えば、
J1：何年生ですか？。
J2：えーとい今2年生です、2年生です、というか名前からまだゆっ { てない。
J1： { あそう
 { ですね。
J2：KS です。
J1：K さん。

出典：宇佐美(2003)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ: 以下、BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13 - 14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2) (研究代表者：宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、pp.4-21 から抜粋。

5. 本研究における「オーバーラップ発話」の定義

実際の日常会話では Sacks ら (1973, 1974) の主張とは異なり、以下の〈会話 1〉のように一人の発話者の発話一部または全体が他発話者の発話と重複してしまうことがよくある。

〈会話 1〉〈日本人同士の友人会話〉

- 2: で、すんごい頑張って入ったんだけど、頑張って・うん頑張って入ったわりには↑、全然追いつけなくて
- 1: { みんなに,,
あ----- } なるほど。
- 2: { ほんとうに } 下のままだったから。

上記の〈会話 1〉のようにある一時点において二人の話者が同時に話をし、二人の発話の一部または全体が重複 (overlap) することを指してオーバーラップ発話と呼ぶことにする。

6. 「友人同士のデータ」の分析及び考察

6.1 友人同士会話のオーバーラップ発話の頻度

本節では、日韓母語話者同士のオーバーラップ発話の頻度を示すことにする。詳細は、以下の〈表 3〉、〈表 4〉と図 1、図 2 のとおりである。

〈表 3〉日韓友人会話の母語話者同士のオーバーラップ発話の頻度の合計

	日本語母語話者同士	韓国語母語話者同士
オーバーラップ発話の頻度の合計	597 回	291 回

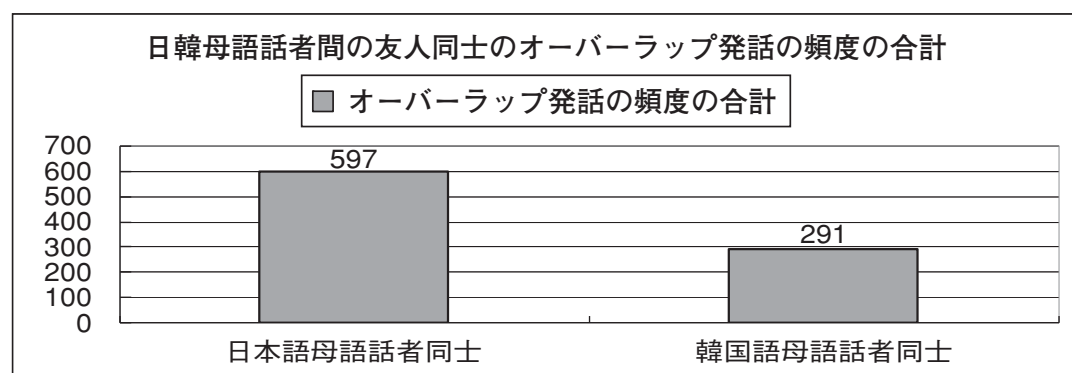


図 1. 日韓友人会話の母語話者同士のオーバーラップ発話の頻度の合計

上記の〈表 3〉、図 1 から分かるように、日本語母語話者のオーバーラップ発話の頻度が圧倒的に多いことが見て取れると思う。これは、日本語母語話者が韓国語母語話者よ

り会話に積極的に参加し、二人が協力し合って発話を共同で作成しようとする調和的な姿勢で会話を進めていることになると考えられる。つまり、重ねられ手の話の調子に合わせて会話を進めていることになるのである。

<表 4> 日韓友人会話の母語話者同士のオーバーラップ発話の頻度

区 分	オーバーラップ発話の頻度	
	日本語母語話者同士	韓国語母語話者同士
実質発話 + 実質発話	110 回	99 回
実質発話が重なる系	99 回	47 回
あいづちが重なる系	287 回	102 回
あいづち + あいづち	101 回	43 回
合 計	597 回	291 回

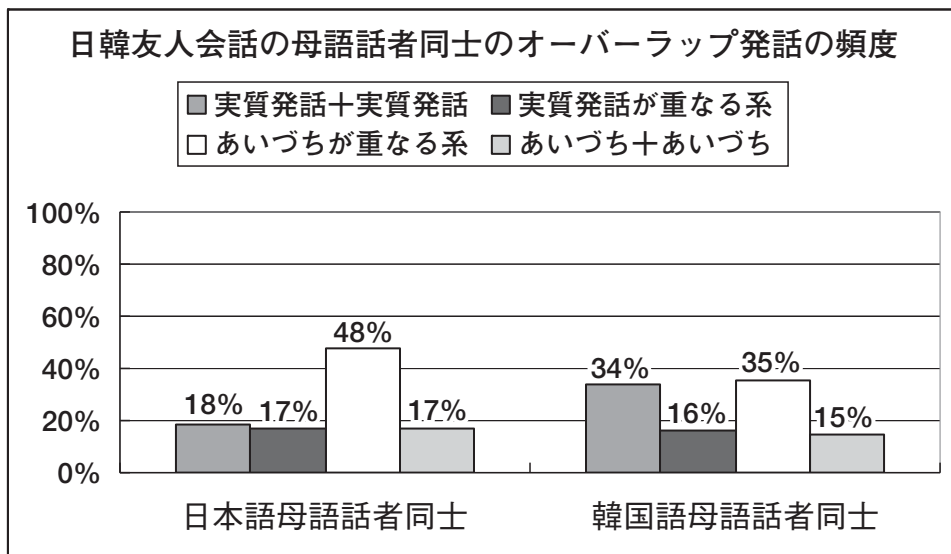


図 2. 日韓友人会話の母語話者同士のオーバーラップ発話の頻度

また、上記の<表 4>、図 2 から分かるように、日本語母語話者のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」のだけで 65% を占めているのが分かるかと思う。

一方、韓国語母語話者同士のオーバーラップ発話は、「あいづちとあいづち」と「あいづちが重なる系」が 50% を占めてはいるものの、「実質発話と実質発話」と「実質発話が重なる系」も 50% を占めているのが見られた。これは、日本語母語話者の 35% より 15% も上回っている結果となった。なお、オーバーラップされて会話が中止される回数も日本語母語話者が 43 回 / 597 回⁵ のうち、話題を拡大して展開するケースが 1 回に対して、韓国語母語話者の場合はというと、32 回 / 291 回⁵ のうち、7 回も見られた。つまり、韓国語母語

話者は日本語話母語者と同様に、調和的な側面はあるものの、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話をよく使うことが観察された。

6.2 日本人同士の場合

本節では、実際の日本人同士の友人同士会話データを見ながら考察していきたい。

<会話 32：バイト先の KD さんという方について話している場面>

JFC1：じゃ、KD さんにあんま会わないからわかんないんだよね。

JFD1：あー そうか。

JFC2：うーん、で JFC・N とかもあんまり会わないし、なんとなく。

JFD2：ほんとに。

JFC3：なんか、やすーみで、わたしがし がるうときに、でなんか、夜に (うん) なんか、仕事

JFD3：う。

JFC3 - 1：みたいなのが、来る、わざわざ。

JFD4：あそうなんー。

JFC4：うん。

JFD5：えへー、

JFC5：ほんー と みたいに。

JFD6：いたーみたいな。

JFC6：フフなにしにきたんー。

JFD7：フフフフフフフフ . h h、なんかさー (うん) あれにっっき読ん
でないよね？。

JFC7：うん。

JFD8：あれまだ、めんどくさくなくて途中で、やめてかえちゃったんだけど↑、(うん) なん
かさー、あれ、KDさんのコレクション・(うん)をね↑(うん)SG様と、後みんなで見
てたら、なんかね、ひどいの、フフフなんか、OTさんとかのこことをフフフこれは

JFC8：うん。

JFD8-1：麻薬のみつばいじゃない とか、h なんか、外人がいるととか。

JFC9：みつばフフフ。あー なん
か、ちっちゃいやつでしょうカメラさんに移って、免許証??。

JFC10：免許証だっった。

JFD9：あー 免許証か。

JFD10：と、バイトの人はたいていー、あれか(ううん)でもまん以外もう一人ぐらいし
かいなかったんだけど、h あれか(うん)あと免許証かパスポートなのね。

JFC11：ううん。

⁵ 日本語母語話者同士の友人会話のオーバーラップ発話の合計 597 回のうち、オーバーラップされて会話が中止される回数を表す。

日本人の友人同士の会話は、＜会話 32＞のようなやり取りをよく耳に思う。＜会話 32＞から分かるように、オーバーラップはされていても、重ねられ手の話の調子に合わせてあいづちを打っているのが、話が途切れたり話題が転換されたりすることはあまりなくスムーズにやり取りされているのが分かるかと思う。まず、「JFD5 と JFC5」、「JFD8-1 と JFC9」のオーバーラップ発話以外は、すべて日本人の一番多いパターンである「あいづちが重なる系」のパターンとしてオーバーラップされているのが分かるだろう。これは、「実質発話と実質発話」と「実質発話が重なる系」同士のオーバーラップ発話より、より協力性が高いパターンである。つまり、重ねられ手の話の調子に合わせてあいづちを打っているのである。また、JFC8 と JFC11 を見てみると、JFD8 と JFD10 の話の途中途中 JFC が「うん」とあいづちを打っているのが観察された。これは、JFD の話が長くなるので JFC が「ちゃんと聞いてるよ」というシグナルをあいづちを通じて送っていると考えられる。なお、JFC9 のオーバーラップ発話は、先行発話である「これは麻薬のみつばいじゃないとか」の一部である「みつば」を繰り返してオーバーラップしている場合である。発話内容を繰り返しているということは、聞き手が話し手の発話を「ちゃんと聞いてるよ」だけではなく、発話内容についても「同意しているよ」という意味にもなるのである⁶。

つまり、重ねられ手の話の調子に合わせようとする、すなわち、重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うというポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

＜会話 38：JMF の高校の時の話をしている場面＞

JME1: それは、いやだね、ある程度ね↑、自分の力が、出せるとこの方がいいよね。

JMF1: そう

そう、高校時代はそうだったんだね。

JME2: あそうなの。

JMF2: 高校の時にさ、なんか、県一番だったよね。

JME3: まじで↑。

JMF3: 高校が。

JME4: あこ　　う校・の進学学校だったわけ？。

→ JMF4: で,,

JMF4-1: そう。

JME5: あはー。

→ JMF5: でー、すんーごい頑張って入ったんだけど、頑張って・うん頑張って入ったわりには↑、全然追いつけなくて

JME6: みんなに,,

JMF6: あー　　ーなるほど。

ほんとうに　　下のままだったから。

⁶ 노은희 (1998: 69)によれば、Stubbs (1983)でも、繰り返し表現で「ちゃんと聞いていますよ」という意を伝えることは、相手に対する情緒的な参加を強く見せてくれるのであると指摘したと述べている。

JME7: あー。

<会話 38>から分かるように、JME4 と JMF4 がほぼ同時に発話しようとして生じたオーバーラップ発話であるが、JMF4 の重ね手自身の発話は中止しされていても、重ねられ手である JME を配慮し JME4 の質問に対して JMF4-1 で「そう。」と答えているのが分かるかと思う。また、重ねられ手である JMF5 の発話の途中で JME6 があいづちを打ったので生じたオーバーラップである。しかし、JMF は重ねられ手自身の発話が中止されているにもかかわらず、JME を配慮し JME6 のあいづちに合わせて JMF6 で発話を再開しているのである。つまり、重ねられ手の話の調子に合わせてあいづちを打っているので、オーバーラップはされていても、話題が転換されたりすることなくスムーズにやり取りされているのが分かるだろう。

したがって、<会話 32>と同様、<会話 38>も、重ねられ手の話の調子に合わせてようとする、つまり、重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うというポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

6.3 韓国人同士の場合

本節では、実際の韓国人同士の友人同士会話データを見ながら考察していきたい。

<会話 42: サッカゲームをしようとしていて、KMA が KMB に自信があるかを聞いている場面>

KMA1: 응, 자신 있어?. ; うん、自信はあるの?。

KMB1: 자신 있지 -. ; 自信あるよ。

KMB2: 자신 빼면 자신감 빼면, 내가↑볼링 할 때나↑

→ KMA2:

내기 할 적에 ,,
볼링 ,, ; ボウリング

; 自信なしで、自信なくて、俺が↑ボウリングする時や↑賭けるときに,,

KMA2-1: 볼링 얘기 하지 말라구 . ; ボウリングの話はしないで。

KMB2-1: 내기 할 적에 내가 자신감 없이 한 적은 없어 내가, 내가 멘탈이 조금 약해서 그렇지만.

; 賭けるときに俺が自信なくてやったことはないよ俺は、メンタルの面は少し足りないけど。

KMA3: 지금은 솔직히 자신감이 없을 거야. ; 今は正直、自信ないんだよね。

KMB3: 쫌ㅎㅎ쫌ㅎㅎ . = ; ちよっハハハちよっハハ。

KMA4: = 우흐지금은 솔직히. ; ウフ今は正直に。

KMB4: 조금은 없지만 (우), 지금은 조금 없지만.

; ちよっとないけど (ウ), 今は少しないけど。

→ KMA5:

아까 터키 었는데 ---.

; 先ほど、トルコだったのにー。

KMB5: 아이 터키가 근데 - 역시, 월드컵 3 장 · 삼그 · .

; アイトルコがでもーやはり、ワールドカップベスト 3 · さん · .

KMA6: 이번 16 장, (그러니까) 브라질이랑 성적 똑 같애 이번에 .

; 今回ベスト 16、(だから) ブラジルと成績同じだよ今回。

KMB6: 그러니까 . ; だから。

韓国人の友人同士の会話は、<会話 42>のようなやり取りをよく耳に思う。<会話 42>から分かるように、オーバーラップの回数も日本人に比して少ない⁷し、あったとしても、日本人同士のようないづちとあいつち」と「あいつちが重なる系」も使うものの、「実質発話と実質発話」と「実質発話が重なる系」も多く見られた。これは、「あいつちとあいつち」と「あいつちが重なる系」のオーバーラップ発話より、重ねられ手に対しての協力は低くて重ね手の主導性がより高いパターンである。つまり、重ねられ手の話の調子に合わせるのではなく、重ねられ手に積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。また、KMB2 と KMA2 のオーバーラップ発話をみてみよう。重ねられ手は話を続けているし、重ね手はいったん話が中止されるが、KMA2-1 で重ね手自身の話を続けているのが観察された。さらに、KMB4 と KMA5 のオーバーラップ発話もみてみよう。重ねられ手である KMB5 の話が中止されてはいないが、KMA5 は言いたいことができたために発話の終了を待たずに、「아까 터키였는데; 先ほど、トルコだったのにー。」と自分の話を継続し、話がずれる答えを展開しているのが分かるかと思う。これは、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。つまり、韓国人は重ね手自身のポジティブ・フェイスにより積極的に働きかけるとい、ポライトネス・ストラテジーをとっているのである

<会話 41:好きな色について話している場面>

KFA1: 근데 노란색은 (우) 싫어하는 사람 별로 없는 거 같애 .

; だけど、黄色は (うん) 嫌いな人あんまりないようだね。

KFB1: 그래도 노란색은 ,, ; それでも黄色は,,

→ KFA2: 파랑색도 그렇구 . ; 青色もそうだし。

KFB2: 우, 그래도 노란색은 좀 이기적인 색깔이라면서 그러잖아 .

; うん、それでも黄色はちょっとわがままな色だって言うじゃん。

KFA3: 그래 ?? . ; そうなの?? .

KFB3: 우 . ; うん。

KFA4: 난 노란색이 제일 좋아 . ; 私は黄色が一番好き。

KFA5: 노란색 보면 되게 흥분 되구 (우) 기분이 딱 업이 돼 .

⁷ 齊藤明美 (2005: 42) によれば、あいつちの回数には、日本語と韓国語は少し差があると指摘し、日本人はかなり細かく「そうか」「へえ」「ええ」「うん」などの短いあいつちことばを挿入するが、韓国人は、それほど多くあいつちことばを挟まないとしている。

;黄色を見るととても興奮されるし(うん)気分がアップされる。

KFB4 : 그래 . ; そうなの。

KFA6 : 어 . = ; うん。

KFB5 : = 우-노란색두 그 난 빨간색 . ; うん-黄色もそうだしあの私は赤。

KFA7 : 어, 빨간색두 . ; うん、赤も。

<会話 41>から分かるように、オーバーラップされているのは「実質発話 + 実質発話」のパターンである。これは、「あいづちとあいづち」、「あいづちが重なる系」のオーバーラップ発話より、重ねられ手に対しての協力は低くて重ね手の主導性がより高いパターンである。なお、重ねられ手である KFB1 の話が中止されているのに、KFA2 は先取りして「青色もそうだし」と具体的な例を挙げて自分の話を継続し、話題を展開している。また、KFB1 で中止された話を重ねられ手である本人が KFB2 で自己修復しているのも分かるかと思う。これも、重ねられ手の話の調子に合わせるのではなく、重ねられ手に積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話であると考えられる。

つまり、韓国人は重ね手自身のポジティブ・フェイスにより積極的に注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのである。

7. まとめ

本研究では、会話の流れに沿って織りなされる話し手、聞き手のストラテジーのうち、話者交替の際に生じるオーバーラップ発話に注目し、日韓両言語の友人同士の会話におけるオーバーラップ発話の日韓の間にどのような類似点と相違点があるのかをポライトネスの観点から分析した結果、次のようなことが明らかになった。

- (1) 友人同士の会話におけるオーバーラップ発話は、日本人でも韓国人でも重ね手と重ねられ手の両方のフェイスに注意を払うという、ミックス・ポライトネス・ストラテジー⁸を使うことが明らかになった。
- (2) 日本語母語話者の場合、合計頻度では、韓国語母語話者同士より2倍以上を上回っているのが見られた。なお、主に使うパターンとしては「あいづちが重なる系」のパターンであり、48%を占めているのが観察された。これは、韓国語母語話者同士の場合より13%上回る結果となった。つまり、重ね手が重ねられ手に「ちゃんと聞いていますよ・関心を持っていますよ」というシグナルとしてのオーバーラップ発話を主に使っているのが分かった。したがって、日本人は重ねられ手の話の調子に合わせて重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのが明らかになった。

⁸ 談話の成立は話し手と聞き手とのフェイスのやり取りであり、対面言語行動を分析する際に、Brown & Levinson (1987) のポライトネスのようにもっぱら聞き手側のフェイスを念頭に置いたものではなく、話し手と聞き手の両方のフェイスから分析するポライトネス・ストラテジーである。詳細は、林河運 (2008) を参照。

- (3) 一方、韓国語母語話者の主なストラテジーは、「あいづちが重なる系」と「実質発話と実質発話」のパターンであり、「実質発話と実質発話」と「実質発話が重なる系」だけで50%を占めているのが観察された。なお、重ねられ手の話が中止されていても、重ね手は自分の話を継続し話題を展開したり、具体的な例を挙げて話題を展開したりしているのも多く見られた。つまり、重ねられ手に対して積極的に働き、会話を自ら主導的に導くオーバーラップ発話である。すなわち、韓国人は重ね手自身のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっているのが明らかになった。
- (4) さらに、「友人同士会話のオーバーラップをする」という場面を Brown & Levinson に沿って考えれば、日本人も韓国人も同じポジティブ・ポライトネス・ストラテジーをとっていることになり、日本人と韓国人との差が見えなかったのである。しかし、重ね手と重ねられ手の両方のフェイスを用いて分析することによって、日本人は重ねられ手のネガティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーを、一方、韓国人は重ね手のポジティブ・フェイスにより多くの注意を払うポライトネス・ストラテジーをとっていることが明らかになった。

参考文献

- 生駒幸子. 1996. 「日常会話における発話の重なる機能」『世界の日本語教育』6, 国際交流基金, pp.185-199.
- 林河運. 2008. 『日韓の対面言語行動の対照研究—ポライトネスの観点から—』2007年度新潟大学大学院博士学位論文
- 宇佐美まゆみ. 2003. 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ : 以下, BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2):(研究代表者:宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, pp.4-21.
- 姜昌妊. 2000. 「日韓男女大学生の会話対照研究—「重なり」を中心に—」『かほよとり』8, 武庫川女子大学大学院, pp.39-49.
- 齊藤明美. 2005. 『ことばと文化の日韓比較』世界思想社
- 佐々木倫子. 1994. 「会話スタイルとレポート—日英・若い女性の座談例から」『研究報告集』15, 国立国語研究報告 107, 秀英出版
- 都恩珍. 2001. 「日・韓両言語の重なりをめぐる—コミュニケーションへの影響を中心—」『筑波応用言語学研究』第8号, pp.57-70.
- 都恩珍. 2002. 「日韓発話電話会話の構造と発話の「重なり」」『筑波応用言語学研究』第9号, pp.73-86.
- 都恩珍. 2003. 「発話の「同時発話 (Overlap) の類型化」」『日語日文研究』第44輯, 韓国日語日文学会, pp.1-20.
- 都恩珍. 2004. 「日常会話における同時発話—発話文類型に見る機能性—」『桜花学園大学

- 人文学部研究紀要』第6号, pp.203-221.
- 藤井桂子. 1996. 「日本語の発話の重なりの特徴—重なりの機能の分析から」『人間文化研究年報』第20号, お茶の水女子大学人間文化研究科, pp.268-277.
- 吉田智子. 1989. 「発話の重なり現象の考察—電話会話の分析—」『日本語教育論集』6, 国立国語研究所, pp.76-93.
- Brown, P. & S. C. Levinson . 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. Schegloff E. A. and G. Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language*50-4, pp.696-735.
- Schegloff E. A. & Harvey Sacks. 1973. "Opening up closings." *Semiotica*8, pp.289-327.
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis*. Oxford: Brasil Blackwell.
- 김순자. 1999. 「대화의 맞장구 수행 형식과 기능」『텍스트언어학』6, 텍스트언어학회, pp.45-69.
- 노은희. 1998. 『대화 지도를 위한 반복표현의 기능연구』서울대 박사학위논문
- 임규홍. 2001. 「국어 담화의 끼어들기 유형에 대한 연구」『언어과학연구』20, 언어과학회, pp.321-352.